

リードカナリーグラスの窒素施肥反応 (第2報)

中嶋吉直・*波多江弘・石原 健・吉村征彌 (熊本県農業研究センター・*熊本県畜産課)

Yoshino NAKAHATA, Hiroshi HATAE, Takeru ISHIHARA and Seiya YOSHIMURA : Growth Response of Reed Canarygrass under the various level of Nitrogen Fertilization (No. 2)

近年、トウモロコシ-イタリアンライグラス体系における一時期の労働過重を避けるために、平坦地帯においてもリードカナリーグラスの栽培が散見されるようになってきた。本草種は寒地型牧草の分類に属することから暖地平坦地帯における研究はほとんどなく、本草種に対する栽培並びに肥培管理技術の確立がもたれている。

前報¹⁾では、暖地平坦地帯におけるリードカナリーグラスの窒素施肥反応について利用初年目(播種翌年)の結果について報告した。本報では草地として安定した利用2年目の結果について報告する。

1. 試験方法

供試圃場は農業研究センター内水田(造成田)を1990年10月に耕起法により造成した転換畑で、造成時に石灰質資材として苦土炭カル15kg/a、基肥としてN-P₂O₅-K₂Oをそれぞれ0.8-1.0-0.8kg/a施用した。品種はベンチャーを用い、0.2kg/aを散播した。試験処理として窒素施用量5水準(無施用:0, 少量:0.4, 中量:0.6, 多量:0.8, 極多量:1.0kg/a)を設け、各刈取り時期毎にNK化成(16-0-16)を用いて施用した。

刈取りは年4回とし、1番草は5月25日、2番草は7月7日、3番草は9月4日、4番草は11月5日に行った。

2. 試験結果

1) 利用初年目では栄養生長期の3・4番草では窒素多肥によって生育が抑制された¹⁾が、2年目は全生育期間を通じて窒素施用量に対応し、初年目の施肥反応とやや異なった。

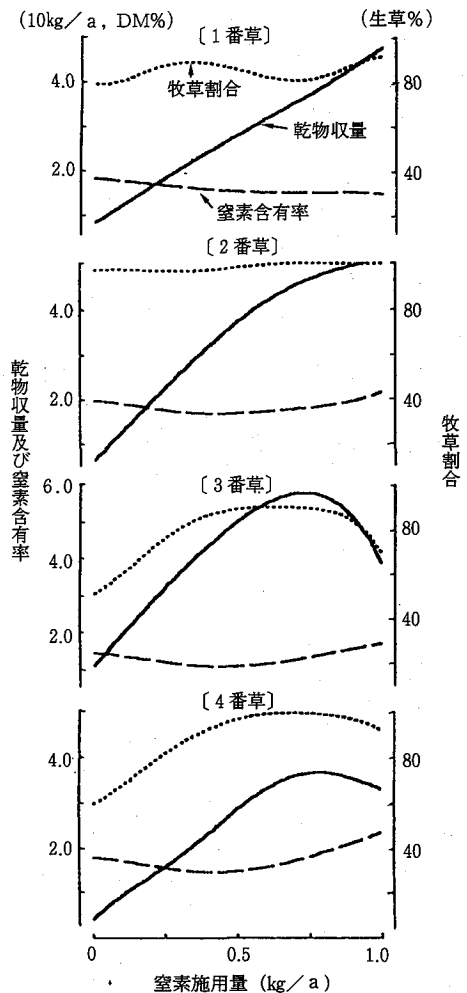
2) 牧草率に及ぼす施肥の影響は3番草以降で認められ、窒素施用量の増加につれて牧草率も高まるが、極多量では逆に低下した。これは弱小個体の被圧・枯死による雑草侵入の影響が大きいものと考えられた。

3) 日乾物生産量は1番草では施用量の増加に伴って直

線的に増加したが、2番草では多施になるほど増加割合が小さくなり、3番草以降では極多量では逆に低下した。4) 第1図から判断すれば、草地として安定したリードカナリーグラスに対する窒素施用量は1番草では本試験施用量よりもさらに多いものと考えられるが、2番草では0.8~0.9kg/a、3番草では0.7~0.8kg/a、4番草では0.6~0.7kg/aが施用適量と判断された。

引用文献

- 1) 中嶋吉直・波多江 弘・石原 健・吉村征彌: 九農研 55, 146, 1993



第1図 窒素施用が乾物収量、窒素含有率及び牧草率に及ぼす影響

第1表 日伸長量及び日乾物生産量

項目	処 理	1番草	2番草	3番草	4番草
日伸長量 (cm/日)	無施用	0.56	0.91	0.75	0.43
	少 量	0.81	1.31	1.09	0.64
	中 量	1.19	1.93	1.37	0.89
	多 量	1.49	2.24	1.46	1.03
	極多量	1.73	2.42	1.69	1.00
日乾物生産量 (kg/a・日)	無施用	0.15	0.15	0.19	0.07
	少 量	0.45	0.75	0.76	0.37
	中 量	0.58	0.98	0.93	0.54
	多 量	0.71	1.11	1.01	0.61
	極多量	0.87	1.19	0.67	0.53